

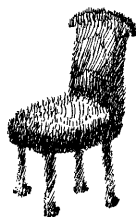
りたての頃のように新鮮な気持ちで子どもに向かい合える保育者でいたいと思う。そして時々は記録などを読み返しながら、何もかも分からず真っ白な、でも一生懸命な気持ちをいつまでも忘れな

いようにこれからもやっていきたいと思う。

(茨城大学教育学部附属幼稚園)

## 在外子女の異文化対応の諸相

——異文化間を往還する者のストラテジー——



渋谷 真樹

グローバル化する現在、多くの人が国境を越えて行き来している。父親の転勤に伴って海外で

生活する日本人子女が増えているのも、その一環である。在外子女と呼ばれる彼・彼女達は、ある

時点で海外に渡り、数年後に日本に帰る、というだけでなく、日々の生活の中でも、異なる文化の間を往来することを余儀なくされている。たとえば、家庭では日本人の親・きょうだいに、学校や社会ではホスト国のマジョリティ集団に多く接触して、その都度、その場に相応しい自分を表現しようとしているにちがいない。

二か年に渡る英国留学中、私は、ロンドンとその近郊に学ぶティーンエイジの日本人女子生徒二十名近くに会い、話を聞く機会を持った。そして、彼女達が異文化間を移動する際に遭遇すると予想される場面をさまざまなテキストを使って提示し、それを基に彼女達と話し合うことによつて、彼女達が異文化に対峙する姿勢を垣間見ようと試みた。ここでは、そのようにして集められた彼女達の会話の一部を紹介しながら、日常生活の中で自文化とホスト国の文化の対立とその切り

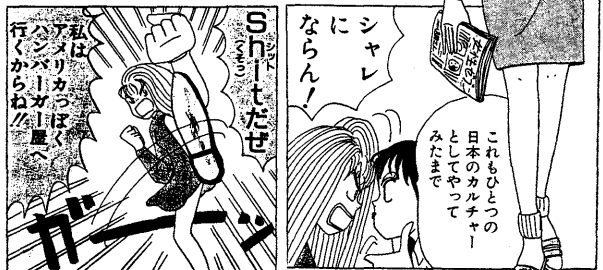
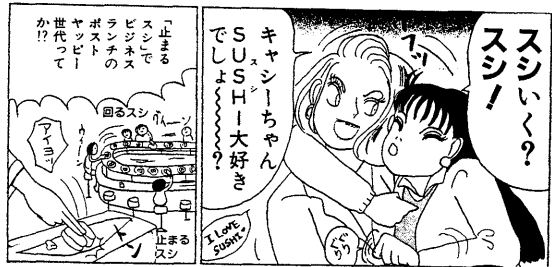
抜け方をみていこう。

私が生徒との会話の糸口の一つとして用意したのが、中尊寺ゆつ子の『お嬢さん2』（一九九四年、双葉社）の部分である。ここに示した一場面では、文化の衝突と選択というテーマが、ニューヨークで働く二人の日本人OLの昼食をめぐる口論という形で戯画化されている。東京から派遣されたばかりの麻子は、どこにいようが「日本のOL」流を貫くマイペース型。さまざまな人種の渦巻くニューヨークでは、自分の居心地のよさを追求するのが一番とばかりに、この場面でも、サンダル履きで寿司屋に行こうとしている。対するヒロミは、滞米五年で、「現地採用のバイリンガル」である。実力主義のアメリカ文化に惚れ込んで、ファッションも食べ物もアメリカ式にこだわっている。ここでは、スシは日本文化をハンバーガーはアメリカ文化を表象して、ニューヨ

クに住む日本人女性  
の文化的アイデン  
ティティを明かす踏  
絵ともいっべき役割  
を担っている。

さて、私の出会っ  
た女子生徒達は、こ  
の漫画からさまざま  
な読みを紡ぎ出し  
てくれた。「アメリカ  
にいたらアメリカ文  
化を学びたい。そ

りゃあ、私も、日本食に行く時もいっばいある  
し、やっぱり日本人なのかなと思う時はいっばいあ  
る。でも、建て前としては、アメリカ文化を学ぶ  
べきだと思う」と、ハンバーガー派のヒロミを支  
持したのはエイコである。日本人学校で寮生活を



「お嬢さん2」(中尊寺ゆつ子、双葉社) P44、45から抜粋

送る彼女は、イギリスとはいえ、「日本人と日本  
語しか喋らない」「日本が凝縮された」環境に自  
分はいると考えている。そして、帰国してもちっ  
とも「帰国子女」らしくないであろう自分を、  
ちよつぱり不甲斐なく感じてもいる。高学年に

なって初めて海外生活をする事になった自分には、日本人学校が最も安全な場所であったことを承知しつつも、「在外子女」経験は未知の憧れであり、それを奪った日本人学校という防壁を恨めしく思っているのだ。

逆に、「やっぱ日本人なんだし、日本的なところもなくっちゃさ」と言うのはカオル。彼女は、「アメリカを意識し過ぎてる」ヒロミに批判的である。一方で、「日本人でアメリカに住んでいるのに日本のお寿司食べるのはちょっとダサイ」という見方があることも承知している。そんな彼女の最終決定要因は、「みんな」の意向である。みんなが寿司屋へ行けば寿司屋へ、ハンバーガー屋に行けばハンバーガー屋へとついていく。マイノリティである自分の立場を擁護しつつ、マジョリテイへの目配りを怠らない、現地校は「あんまり面白くないけど、一応行ってる」と言う彼女が、

「外人」として暮らす中で身に付けた処世術だろうか。

同様に、サオリも、異国にあって寿司が食べたと思うことを「日本人だから」と容認し、「どうしてもこっちの人になろうとは思わない」と言う。在英二年余、「もう、こっちの子に染まってきたような気がする」と言う一方で、日本に帰ればまた「すぐ適応する」だろうと言う彼女。「どっちでもなれる」という彼女の秘訣は、「みんなの話題についていこうと思って、自分でいろいろ研究することである。そのためには、「普通だったら見ないような雑誌とか見てみたり」もする。ただし、それは、無条件に相手に同調するためではない。情報の収集は、むしろ、相手の興味を知って、それに対する自分の意見を持つためである。カオルと違い、サオリは、批判や異義申立ても「みんな」に参加する一形態であると考えてい

る。

この態度は、現地校に転校して半年のアキコの実践に共通する。アメリカで小学校を、日本で中学校を終えた後、また海外で勉強することになった彼女は、「どうすればいいかわからないとか、そういう時は周りを見たりするけれども、周りに合わせるっていうのは別に」と話す。新しい環境の中で生きていくためには、マジョリテイ集団の興味・関心やルールを学ぶことは急務である。けれども、そのために自分の意思を押し曲げることはない。素早く接点を作りながら、あえて全面的な同調はしない―これも異文化移動のひとつのストラテジーである。

ハンバーガー⇨アメリカ、寿司⇨日本という図式自体を無化してしまったのが、現地校で絵画を学ぶノリコである。昼食の決め手は値段と栄養、という現実派の彼女は、ハンバーガーは油っこい

し、寿司は高い、だから、サンドイッチを自分で作って持って来たかどうか、と考えた。彼女は、「日本人だから日本式にしなきゃってこともないし、アメリカにいるからアメリカ式っていうのも」「別に全然関係ないと思う」と言う。だから、彼女にとって、自分が日本人であることや海外で生活していることは、自分を説明する上で重要でない。「自分のことを伝えるための手段」は、「自分が今何をやっていて、将来何をやりたいか」だと言う彼女は、海外で活躍する若い日本人芸術家達を彷彿させた。

ノリコの考えを突き詰めると、「私は私だからやるもんで、いちいち日本人だからとか、国のために立って、国の見本みたいにそうすることは全然ないから」というミユキの発言に突き当たるだろうか。就学前から英国で暮らす彼女は、「遺伝的には」日本人だが、故郷は自分が幼年期を過ご

した場所だと言う。考え方は自然、イギリスのそれに影響されているだろうが、だからと言って「イギリス人として」行動することはない。私の出会った生徒の中でただ一人、私の用意したテキストをpatrioticだと（英語で）明言した彼女は、「一人一人が国に動かされないで、自分の考えたことで動かされていると信じたい」と述べた。彼女はまた、「日本人」や「国際人」といった概念を、自明視することを許さなかった。その裏にひっそりと貼り付いたナショナリズムの影を見逃さなかったからであろう。

以上、漫画の一場面に繰り広げられた会話を中心に、在外子女のさまざまな異文化対応の在り方を見てきた。「慣れる」という言葉を敢えて使わなかったのは、それが異文化間教育における「適応」というタームを連想させ、個人のマジョリテイ集団への一方的同化を要求する態度と結び付

くことを怖れたからである。ここで私が問題にしてきたのは、異文化対立状況を切り抜け、できうる限り快適に、自分らしくあろうとしている子ども達のさまざまな戦略である。なかには、流動的、多面的、ハイブリッドなどと形容してよさそうな発言も見られた。また、彼女達が自分を規定する際に、「遺伝」的系統、成育歴、そして国家が、異なった重要度で参照されているらしいことも窺われた。今後、追究されるべき問題である。

（お茶の水女子大学大学院）

\*本文中の女子生徒の名や所属などは、プライバシー保護のため、論旨に影響しない範囲で変更した。この場を借りて、調査に協力してくださった生徒のみならず、および保護者、先生、紹介者のみなさまに感謝の意を表したい。